

福岡工業大学 学術機関リポジトリ

初年次教育における科目間連携の効果：「キャリア・デザイン」と「コミュニケーション・デザイン」を事例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福岡工業大学 教育開発推進機構 公開日: 2024-09-05 キーワード: First Year Experience, educational design, effect, interdisciplinary collaboration, higher education 作成者: 中野 美香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/11478/0002000106

初年次教育における科目間連携の効果：「キャリア・デザイン」 と「コミュニケーション・デザイン」を事例に

中野美香（教養力育成センター）

Effects of Interdisciplinary Collaboration during First-year Experience: A Case Study on the Courses of “Career Design” and “Communication Design”

Mika Nakano (Center for Liberal Arts)

Abstract

In higher education, in their first year, students adapt to their new learning environment and develop academic and personal growth for their future career. This content varies widely among educational institutions, necessitating a thorough examination of educational effectiveness through diverse perspectives. In 2023, Fukuoka Institute of Technology devised a new curriculum that incorporated the courses “Career Design” and “Communication Design” in the first and second semesters, respectively. This study measures the effectiveness of early education in interdisciplinary collaboration. An online survey conducted in May and July 2023 and January 2024 received replies from 989, 877 and 750 participants. This survey investigated the impact of changes in attitudes toward life design through multiple comparisons. Significant differences in scores for life compass, design thinking, and design tools across responses indicated the effectiveness of interdisciplinary collaboration. Further detailed analysis focusing on individual students is required for future research.

Key words: *First Year Experience, educational design, effect, interdisciplinary collaboration, higher education*

1. 問題と目的

大学における初年次教育は、大学に入学した学生が新しい学習環境に順応し、学問的・人格的成長を築く上で重要な段階である。初年次教育のカリキュラムは大学での学習に必要な基本的なスキルや知識を身につけるために設計されているが、アカデミックスキルやジェネリックスキルの基礎はもちろんのこと、学生の社会的・心理的成長やキャリア形成も重視されるようになってきている。¹⁾ 初年次でグループワーク等を通じて学生が成功体験を積むことは、自己理解を深め、その後の学習モチベーションや自己効力感の向上につながるだけでなく、キャリア探索を持続可能なものにするための基盤形成となると考えられている。²⁾

現代においては初年次教育に求められる内容は

多様化し、そのため個々の大学において異なるアプローチや授業手法が採られている。³⁻⁵⁾ 特に人口減少問題を抱える本邦においては、入学者の学力、学習動機、学習目標の差など入学直後から取り組むべき課題は少なくない。また個別最適な学びの実現や合理的配慮の観点から、学生がより柔軟に学習し、自分のペースで進められるような学生の多様なニーズや背景に応じた教育プログラムの提供が求められる。⁶⁻⁷⁾ このような問題に対してカリキュラムが適切に設計されないと、学生が十分なサポートを受けられずに挫折したり、学生の学習成果や満足度に影響を与える可能性がある。そのため、初年次教育の効果を様々な観点から詳しく調査・点検し、最新の教育手法⁷⁾を取り入れ、社会的ニーズや受講者の声を反映したカリキュラ

ムの構築が必要である。

福岡工業大学においては、平成 22 年度文部科学省大学生の就業力育成支援事業への採択を契機に、「企業が求める人材像と学士課程における教育目標とを整合的に捉えつつ、課外プログラムとの連携を念頭においた全学的、体系的な教育プログラムを整えることによって、学生の就業力向上を図ること」を目的とし、平成 24 年度からキャリア形成およびコミュニケーション教育に関連する科目を必修化した。本学学生が修得すべき力を「志向する力」・「共働する力」・「解決する力」・「実践する力」に分けて、職業観、目標設定、自己管理及びコミュニケーション等をテーマとする科目を初年次に開講することで、社会的・職業的自立へ向けた基盤形成を図ることとした。⁹⁻¹⁰⁾ 2018 年度からは教養教育カリキュラム全体を改正し、本学を卒業する学生がどの学部学科に属しようとも身につけておくべき能力（教養力）を育成するカリキュラムに位置付けられた。一方で、昨今においては第 4 次産業革命による経済活動や人々の働き方やライフスタイルの変化により、時代に即した教育の見直しが求められている。また中央教育審議会は高等教育機関に対し「2040 年に向けたグランドデザイン（答申）」として学習者の『主体的な学び』の質を高めるシステム構築と生涯学び続ける力を有する人材の輩出を要請した。¹¹⁾ 先行きの見通しが立ちにくい VUCA 時代では環境の変化に応じて一人ひとりが自らのキャリアや生き方を模索、設計、修正するデザインの必要性が高まっている。つまり卒業後の就職をゴールとしたキャリア教育ではなく、一生涯を通じて学び続け、周囲と上手にコミュニケーションをとりながらも、自ら社会を変革する能力・資質の育成が大学に求められており、長期的な成長の支援が必要である。

そこで時代の変化に対応するために、2023 年度より 1 年次前期科目を「キャリア・デザイン」、1 年次後期科目を「コミュニケーション・デザイン」に変更し、1 年間にわたりキャリアおよびコミュニケーションのデザインに求められる資質・能力

の向上をねらいとする新カリキュラムを導入した。本研究は、2023 年度に実施した両科目の連携による学生の意識変容に対する初年次教育の効果を明らかにし、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

2. 講義の概要

2.1 科目の位置づけと構成

1 年次前期科目「キャリア・デザイン」および 1 年次後期科目「コミュニケーション・デザイン」は、教養力育成科目の必修科目で構成されるコア群に位置付けられる。コア群は、本学を卒業する全ての学生がどの学部学科に所属しようとも身に付けておくべき知識・能力の核として必修科目から成る。これらの科目はキャリアとコミュニケーションという異なるテーマを扱うが、よりよい人生を送るという点においては相互補完的であり、またそれらをデザインするという点においては共通の目標がある。

2012 年度からの実践から得た知見を活かし、学生の態度や意識変容を促すために講義の全体的な構成を共通にした。表 1 に授業計画を示す。灰色の網掛けをした講義回が科目間の共通部分である。具体的には、両科目ともに 90 分 15 回の講義のうち第 1～5 回を基礎期、第 6～9 回を応用期、第 10～14 回を発展期に分け、段階的に学習を進める構成とした。各期の最後にアセスメントを実施し、受講生やプレゼンテーションやディスカッションを通じて学んだことをまとめると同時に、他の学生の学びを参照し、学習の統合を促すようにした。またアンケートを各科目で 5 回ずつ実施し、自身で学習成果を振り返るようにした。毎回の講義ではワークシートに考えたことを記述し、オンライン上の学習ポートフォリオの FIT-AIM に受講態度や授業理解について記述する課題を出した。

これらの科目を全学部（工学部、情報工学部、社会環境学部）で開講するにあたり、2023 年度は 1 クラスの受講定員を 50 名程度とし、半期 22 クラスで実施した。担当する教員は「キャリア・デ

デザイン」は8名（うち非常勤講師6名）で、「コミュニケーション・デザイン」は7名（同5名）であった。両科目ともすべての講義でアクティブラーニングを導入し、先輩学生のクラスサポーター（CS）1名が講義補助に入った。質保証のため共通のテキストや講義資料を作成するとともに、打ち合わせやアセスメントの結果の共有等を通じて細目に教員間でコミュニケーションを取り、方針にずれが生じないようにした。また講義の運営には大学の内外の関連部署や関係者と連携した。包括連携協定を結ぶ西日本新聞社に両科目で第6回に出前講義を依頼し、後期には新聞コミュニケーション大賞コンテストを実施した。以下にシラバスに示した内容を基に各科目の概要を述べる。

(1)「キャリア・デザイン」:「キャリア・デザイン」は自己理解、社会理解および自己と社会の関連付けのプロセスを踏まえて、自らのキャリアをデザインすることを到達目標とする。15回講義のうち基礎期では、自身の過去を振り返り、現在の行動特性、ストレス耐性を理解する。また大学進学目的、選択した専門分野などを将来の計画やビジョンに照らして、自身の現状の課題を総合的に検討する。応用期では、グローバル社会・テクノロジーの変化と雇用制度、ジェンダーとキャリ

ア、ワーク・ライフ・バランスをテーマに、ジグソー学習法を用いた調べ学習を通じて社会理解を深める。発展期では、基礎期と応用期の学びを統合し、自己と社会の関連付けをおこなう。はじめに働く意味と職業観、アントレプレナーシップについて考察する。次にケース・スタディとして活躍する企業人や先輩（就職・大学院）を招聘し、資格取得やリカレント教育など自身のキャリアの可能性を具体的に展望するとともに、洞察を深める。第14回では講義の全体の総括として、大学4年間の計画を含む自身のキャリア・デザインを表現し、第15回で学習プロセスをレポートにまとめる。

(2)「コミュニケーション・デザイン」:「コミュニケーション・デザイン」は、自らの行動や思考の傾向を理解した上で議論を通じて適切なスキルを習得し、コミュニケーションをデザインすることを到達目標とする。トピックはSDGsのテーマを扱う。基礎期ではコミュニケーションの重要性を理解し、心理的安全性の確保など社会的・状況的側面、自身の行動特性の個人的側面、グループの集団的側面について知識を深める。考えを整理し、わかりやすく相手に伝えるスキル、批判的に考え、他者の意見を聞き、評価するスキルを習得

表 1 初年次教育の授業計画（2023年度）

回	キャリア・デザイン(前期)	コミュニケーション・デザイン(後期)
1	コース・イントロダクション:VUCA時代に必要なマインドセットと習慣	コース・イントロダクション:VUCA時代に必要なマインドセットと習慣
2	自己理解(1):過去を振り返る	考えを整理し、伝える
3	自己理解(2):現在の行動特性を分析する	批判的に考え、伝える
4	自己理解(3):将来をイメージする	他者の意見を聞き、評価する
5	自己理解(4):アセスメント・プレゼンテーション	基礎期アセスメント・ディベート
6	社会理解(1):グローバル社会・テクノロジーの変化と雇用制度	情報を収集する
7	社会理解(2):ジェンダーとキャリア	テーマを分析する
8	社会理解(3):ワーク・ライフ・バランス	自分の意見と他者の意見を比較し、まとめる
9	社会理解(4):アセスメント・プレゼンテーション	応用期アセスメント・ディベート
10	自己と社会の関連付け(1):ケーススタディ・先輩から学ぶ	わかりやすくメモを取る
11	自己と社会の関連付け(2):ケーススタディ・企業人から学ぶ	議論をジャッジする
12	自己と社会の関連付け(3):働く意味と職業観・アントレプレナーシップ	チームで協力する
13	自己と社会の関連付け(4):アセスメント・プレゼンテーション	発展期アセスメント・ディベート
14	キャリア・デザインを表現する	コミュニケーション・デザインを表現する
15	レポート作成および解説	レポート作成および解説

する。応用期では、説得力を向上させるための情報収集、テーマ分析、異なる意見を比較し、まとめるスキルを習得する。西日本新聞社に出前講義を依頼し、社会の最新動向やインタビュー方法を学ぶ機会を設けるとともに、興味のある新聞記事に関する身近な人との議論を文章にまとめる「新聞コミュニケーション大賞コンテスト」を実施する。発展期ではメモの取り方、ジャッジ、チームでの協力について学習する。第14回では講義の全体の総括として、自身のコミュニケーション・デザインを表現し、第15回で学習プロセスをレポートにまとめる。

2.2 共通するデザインの考え方

前期・後期を通じて人生のデザイン能力を育成するために、スタンフォード大学の『ライフデザイン講座』で実践されている「人生のコンパス」「デザインの考え方」「デザインのツール」の3つの考え方を基本方針として採用した。¹²⁾ 図1～3は書籍に書かれている内容を基に筆者が作成した。まだはっきり将来像を描けなくても、講義で他者と協力してディスカッションをおこない、プレゼンテーションを重ねることで、学生が少しずつやりたいことを掴むことをねらいとした。講義間で共通する3つの考え方について以下に示す。

(1) **人生のコンパス**: 自分的人性と自分の行動と自分の考え方が矛盾なく一貫性を持つように考えていくこと。人生には一時的にうまくいかないことがあっても、この3つの調和を実現しようとしていることが重要である。

(2) **デザインの考え方**: 人生は成長と変化の繰り返しで、何が自分にとって本当の幸せかは環境の変化に合わせて試行錯誤を続けてはじめて得られる。自分らしい人生を送るためには、まずは今ある問題を探し、どうすれば解決できるか対策を考えて、実行する。

(3) **デザインのツール**: 自分らしい人生を積極的に追い求め、他者と一緒に作り上げていくための5つのツールは「好奇心を持つ」「やってみる」「別の視点で捉え直す」「助けを借りる」「人生はプロセスだと理解する」

の視点で捉えなおす」「人生はプロセスだと理解する」「助けを借りる」である。これらは思い込みや独りよがりを防ぎ、前に進むために必要な行動である。

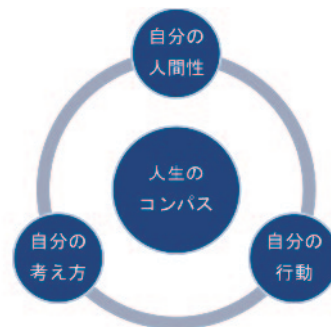


図1 人生のコンパス



図2 デザインの考え方

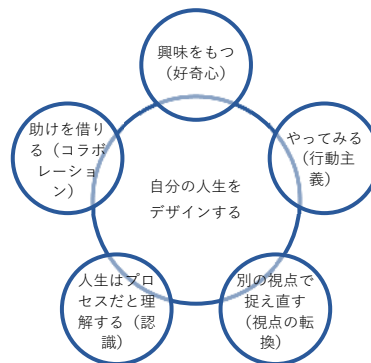


図3 デザインのツール

2.3 科目間連携の方法

学生の長期的な成長に向けて、科目を越えて理解を統合し、主体的に概念化していく力の育成支援は大きな可能性と教育効果をもたらす。¹³⁾ そこで2.2で述べた3つの共通する考え方を効果的に身に付けられるように科目間連携をおこなった。以下に示した内容は「キャリア・デザイン」「コミュニケーション・デザイン」どちらにも共通する。第1回講義では、人生のデザインに関する基本的

な考え方を説明し、自分の現状や考えたことをメモする。第 5, 9, 13 回で実施するアセスメント・プレゼンテーションでは各講義で学んだこと・気付いたこととデザインの基本的な考え方を関連付けて記述し自己評価する。第 14 回講義でグループで自身の考えの変化や成長の度合いについてディスカッションする。第 15 回講義では、3 つの考え方に関する自分の現状や考えを記述し、第 1 回講義で書いたことと比較する。またレポート作成時に活用する。

上記に述べたように、デザインに関して繰り返し考え、クラスの学生同士で共有することでお互いの成長や考えの変化を共有するようにした。またテキストに考えを書いて記録するとともに、オンライン上の学習ポートフォリオである FIT-AIM を使用して毎回の授業の振り返りを記述させた。学期の始めには学期の目標設定と、前学期の振り返り（後期のみ）を書かせた。また「学習者が自らのキャリアや人生をデザインするための教科書は、学習者が自らデザインすべき」という考えから、通年で使用できるテキストを執筆した。¹⁴⁾ 正解が決まっている科目においては、一から十まで丁寧に解法を説明するような指導が求められるが、この科目がねらいとするキャリアの育成には正解はなく、学び方は多様である必要がある。教員ができることは、学習者が講義内外で自ら学びを深める環境づくりであるという方針を教員間で共有した。

3. 方法

3.1 対象者と手続き

対象者は 2023 年度前期科目「キャリア・デザイン」と 2023 年度後期「コミュニケーション・デザイン」の受講者であった。1 年間の講義の変化を分析するために、「キャリア・デザイン」の第 1 回アセスメント（2023 年 5 月の第 5 回で実施）および第 3 回アセスメント（2023 年 7 月の第 13 回で実施）と「コミュニケーション・デザイン」の第 3 回アセスメント（2024 年 1 月の第 13 回で実施）

の回答を対象とした。「キャリア・デザイン」の受講者 1062 名と「コミュニケーション・デザイン」の受講者 1052 名のうち再履修者を除いた 2023 年度入学者の回答を対象とした。受講者に占める対象者の割合は、「キャリア・デザイン」は 1042 名（98.1%）、「コミュニケーション・デザイン」は 1027 名（97.6%）であった。

各講義で担当教員から調査について説明をした後、5 分程度で myFIT のアンケートからオンラインで回答してもらった。回答においては、授業改善を目的にした調査であることを明示し、匿名でおこなわれるため個人が特定されることはないこと、成績・評価に一切関係がないことを説明した。

3.2 質問項目

アンケートで問うた質問項目のうち、本論では 2 科目の共通の考え方に関する以下の 3 つの質問に対する回答を分析する：問 1「人生のコンパス（自分の人間性、考え方、行動の調和）を理解し、実践している」、問 2「デザインの考え方（問題発見＋問題解決＝理想のデザイン）について理解し、実践している」、問 3「デザインの 5 つのツール（好奇心・行動主義・視点転換・認識・コラボレーション）について理解し、実践している」。すべての質問項目は 1「そう思わない」～5「そう思う」の 5 件法で回答してもらった。

4. 結果と考察

本節では 4.1 で人生のコンパス、4.2 でデザインの考え方、4.3 でデザインのツールに関する結果と考察を述べた後、4.4 で総合考察をおこなう。

4.1 人生のコンパス

表 2 に問 1「人生のコンパス（自分の人間性、考え方、行動の調和）を理解し、実践している」に関する結果の記述統計を示した。分析した結果、回答時期の違いが回答者の回答に有意な影響を与えていることが確認された。具体的には、1 要因 3 水準の参加者内計画で実施した分散分析により、

回答時期の間に有意な主効果が見られた ($F(2, 674) = 23.500, p < .001$)。

表 2 問 1「人生のコンパス」に関する
結果の記述統計

回答時期	変数名	N	M	SD
5月	人生のコンパス_5月	989	4.03	.75
7月	人生のコンパス_7月	877	4.19	.71
1月	人生のコンパス_1月	750	4.24	.63

表 3 問 1「人生のコンパス」に関する
多重比較の結果

比較の時期	差	t 値	df	調整 p	効果量 d
5月～7月	-0.150	-5.047	674	<.001	-.205
5月～1月	-0.199	-6.345	674	<.001	-.286
7月～1月	-0.049	-1.654	674	ns	-.074

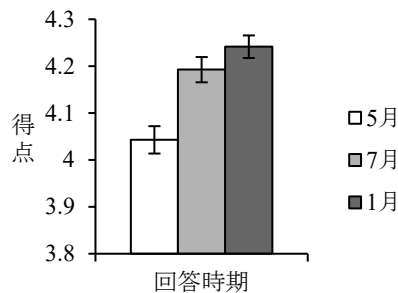


図 4 回答時期による問 1 の得点の変化

この主効果に関する偏 η^2 は .034 であり、小さな効果が認められた。この主効果について、さらに詳細に検討するために多重比較によって、異なる回答時期間での人生のコンパスに対する意識変容への影響を検討した (表 3, 図 4)。具体的には、回答の 5 月、7 月および 1 月の間で多重比較を行った。分析の結果、表 3 に示したような有意な差が確認された。5 月と 7 月の間では、平均差は -0.150、 F 値は 5.047 ($df = 674$) で、 p 値は .001 未満であり、統計的に有意な差異が見られた。効果量 $d = .205$ と小さな効果量が確認された。5 月と 1 月の間では、平均差は -0.199、 F 値は 6.345 ($df = 674$) で、 p 値は .001 未満と、統計的に有意な差異が認められた。効果量 $d = .286$ と小さな効果量が

確認された。一方、7 月と 1 月の間では、平均差は -0.049、 F 値は 1.654 ($df = 674$) で、 p 値は .099 であり、差は有意ではなかった。これらの結果から、回答の 5 月は 7 月および 1 月と比較して人生のコンパスに対する意識変容に対して顕著な効果を持っていることが示された。

4.2 デザインの考え方

表 4 に問 2「デザインの考え方 (問題発見 + 問題解決 = 理想のデザイン)」に関する結果の記述統計を示した。分析の結果、回答時期の違いが回答者のデザインの考え方に関連した有意な影響を与えていることが確認された。1 要因 3 水準の参加者内計画で実施した分散分析をおこなったところ、回答時期の間に有意な主効果が見られた ($F(2, 674) = 32.754, p < .001$)。

表 4 問 2「デザインの考え方」に関する
結果の記述統計

回答時期	変数名	N	M	SD
5月	デザインの考え方_5月	989	3.87	.82
7月	デザインの考え方_7月	877	4.13	.75
1月	デザインの考え方_1月	750	4.20	.69

この主効果に関する偏 η^2 は .057 であり、中程度の効果が認められた。この主効果について、さらに詳細に検討するために多重比較によって、異なる回答時期間でのデザインの考え方に対する意識変容への影響を検証した (表 5, 図 5)。具体的には、回答の時期の間で多重比較を行った。分析の結果、表 5 に示したような有意な差が確認された。5 月と 7 月の間では、平均差は -0.228、 F 値は 6.617 ($df = 674$) で、 p 値は .001 未満であり、統計的に有意な差異が見られた。効果量 $d = .288$ と小さな効果量が確認された。5 月と 1 月の間でも、平均差は -0.298、 F 値は 8.111 ($df = 674$) で、 p 値は .001 未満と、統計的に有意な差異が認められた。効果量 $d = .390$ と小さな効果量が確認された。一方、7 月と 1 月の間では、平均差は -0.070、 F 値は 2.172

($df = 674$) で、 p 値は .030 で 5%水準で統計的に有意であったが、効果量については十分な差があるとは言えなかった。これらの結果から、「デザインの考え方」に対する評定値では、5月よりも7月および1月が、デザインの考え方をより高度に習得していると回答者によって認識されていることが示唆される。また、7月から1月にかけては、ほとんど差が見られなかった。

表 5 問 2「デザインの考え方」に関する多重比較の結果

比較の時期	差	t 値	df	調整 p	効果量 d
5月～7月	-0.228	-6.617	674	<.001	-.288
5月～1月	-0.298	-8.111	674	<.001	-.390
7月～1月	-0.070	-2.172	674	.030	-.097

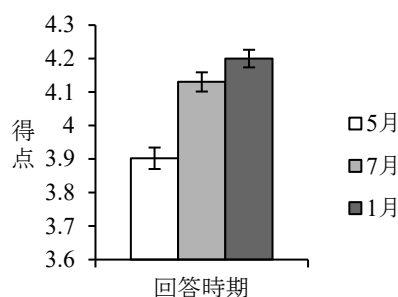


図 5 回答時期による問 2 の得点の変化

4.3 デザインのツール

表 6 に問 3「デザインの 5 つのツール（好奇心・行動主義・視点転換・認識・コラボレーション）」について理解し、実践している」に関する結果の記述統計を示す。分析した結果、回答時期の違いが回答者の回答に有意な影響を与えていることが確認された。1 要因 3 水準の参加者内計画で分散分析を実施したところ、回答時期の間に有意な主効果が見られた ($F(2, 674) = 17.14, p < .001$)。

表 6 問 3「デザインのツール」に関する結果の記述統計

回答時期	変数名	N	M	SD
5月	デザイン5つのツール_5月	989	3.90	.87
7月	デザイン5つのツール_7月	877	4.11	.81
1月	デザイン5つのツール_1月	750	4.14	.76

この主効果に関する偏 η^2 は .025 であり、小さな効果が認められた。この主効果について、さらに詳細に検討するために多重比較によって、異なる回答時期でのデザインのツールに対する意識変容への影響を検証した(表 7, 図 6)。具体的には、各時期の間について比較を行ったところ、表 7 に示したように 5月と7月の間は平均差が-0.167, 7月と1月の間は平均差が-0.210 であり、両ペアともに統計的に有意な差異が見られた(それぞれの F 値は 4.298, 5.363 で、 $p < .001$)。それぞれ効果量 d は .197 と .257 であった。これに対して、7月と1月の間の平均差は-0.043, F 値は 1.206 ($df = 674$) で、 p 値は .228 であり、差は有意ではなかった。この分析から、5月よりも7月および1月でデザインのツールに関する意識変容に対する有意な影響の違いが確認された。しかし、7月と1月の間では有意な差異が見られなかった。

表 7 問 3「デザインのツール」に関する多重比較の結果

比較の時期	差	t 値	df	調整 p	効果量 d
5月～7月	-0.167	-4.298	674	<.001	-.197
5月～1月	-0.210	-5.363	674	<.001	-.257
7月～1月	-0.043	-1.206	674	ns	-.055

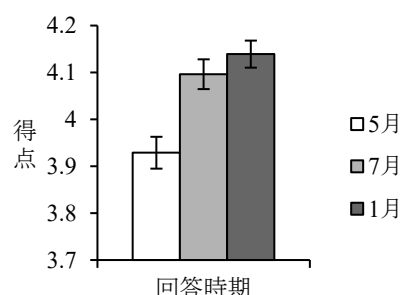


図 6 回答時期による問 3 の得点の変化

4.4 総合考察

前項では問 1「人生のコンパス(自分の人間性、考え方、行動の調和)を理解し、実践している」、問 2「デザインの考え方(問題発見+問題解決=理想のデザイン)について理解し、実践している」、問 3「デザインの 5 つのツール(好奇心・行動主

義・視点転換・認識・コラボレーション)について理解し、実践している」に関する受講者の回答が時期によって異なるか分析した。その結果、すべての質問において5月と比較して7月及び1月の得点が有意に上昇していたことから、初年次において前期・後期で科目間連携した効果があったと言える。特に5月から7月の伸びが顕著であることから、入学直後の1年次前期に大学生活の初動を決定するキャリアの基本的な考え方を教育することの重要性が示唆される。「キャリア・デザイン」では第1回の講義でVUCA時代においては社会の変化に応じて自分らしいキャリアについて真剣に模索し、修正することの重要性を説明した。大部分の学生が受験を終えて大学に入学したタイミングで自分らしい生き方について段階的に考えるプログラムを実施することでキャリアについて考えを深めるとともに、他者受容も高められたと考える。

一方、7月から1月にかけての変化では、問2「デザインの考え方(問題発見+問題解決=理想のデザイン)について理解し、実践している」の回答のみ有意であった。後期の「コミュニケーション・デザイン」はコミュニケーションをテーマにした講義であり、前期のキャリアの講義とは異なり、SDGsに関するテーマについてグループで議論した後、他者からフィードバックをもらう経験を通じて、伝え方や主張の構築方法などの自身の問題と向き合う機会が多かったと考えられる。この点に加えて、後期は前期の成績が決定した後でもあり、学生生活における自身の考え方や行動の問題が具体的に明らかになった可能性もある。このような意味においては、2年次以降も引き続き、問題を発見し、解決する志向性を継続的に育むような働きかけや学年を越えた科目間連携が不可欠であろう。

他方、問1「人生のコンパス」や問3「デザインのツール」についてはキャリア・デザインの講義ですでに高い水準まで伸びていたという見方もできる。この点においては前期でキャリアに関する

科目を、後期にコミュニケーションに関する科目を配当したことが合理的であったとも解釈できる。今後は、次年度も同様の傾向が見られるかについて調査が必要である。また学生が前期に受講した講義で学んできた知識や技能を後期の講義で関連付け、引き出すといった教員の姿勢・態度や講義の工夫に関する知見についても教員間で共有する必要がある。

5. まとめと今後の展望

本研究は、2023年度に実施した「キャリア・デザイン」および「コミュニケーション・デザイン」の科目間連携による学生の意識変容に対する初年次教育の効果を明らかにすることを目的とした。分析の結果、両科目がねらいとする人生のデザインに関する3つの質問すべてにおいて5月と7月および1月の間で有意な向上が見られたことから、導入初年度ではあるが全体として当該カリキュラムは学生の意識変容に対して一定の効果を得られたと言える。

本研究の限界点としては、科目間連携の全体の設計に関わる3つの質問の回答に絞って分析している点や、後期の最後の調査の回答者が他と比べて少なかったことが挙げられる。今後は本研究で扱わなかった質問への回答の分析や、3期にわたりより多くのデータを得る工夫が求められる。また個別の学生の分析については別項に譲り、全体の質を向上させつつ、本学の学生ひとりひとりに最適な学びをサポートする実施体制に関する検討が課題である。

科目間連携を通じて一つの科目では実現できないことが可能となる一方で、担当教員間で共通認識を持ち、全体像を把握するなど密なコミュニケーションが不可欠となる。本研究をきっかけに、初年次のみならず学年を越えた科目間連携の効果的な方法が探索され、長期的な視点に立った学生の学習と成長、社会的責任や持続可能な未来に向けた意識の育成についての議論が活発化することに期待したい。

参考文献

- 1) 山田礼子. (2009). 大学における初年次教育の展開. *クオリティ・エデュケーション*, 2, 157-74.
- 2) 藤澤広美, 相馬敏彦 & 原口恭彦. (2023). 大学初年次のキャリア教育における学習への動機づけがインターンシップ参加意欲に与える影響—進路選択自己効力感の変化による調整効果の検討—. *キャリア教育研究*, 41(2), 35-45.
- 3) 森本康太郎. (2023). A 大学におけるキャリア教育科目の効果測定を試み. *大学教育研究ジャーナル*, 20, 29-35.
- 4) 鬼頭裕介. (2023). 教員養成系大学におけるキャリア教育の現状と課題—〈人づくり〉と〈教師づくり〉の観点から—. *教育論叢*, 66, 9-16.
- 5) 塩見優紀, 小林成美 & 河野誠司. (2024). 神戸大学医学部医学科でのキャリア教育についての考察. *大学教育研究*, 32, 163-178.
- 6) 文部科学省. (2021). 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申). 中央教育審議会.
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2024年5月8日閲覧).
- 7) 田島晶子, 横田晋務 & 田中真理. (2023). 発達障害のある学生を対象としたキャリア教育に関する一考察. *九州大学基幹教育院 基幹教育紀要*, 9, 115-124.
- 8) 松木利憲. (2024). GPS-Academicによる学修成果検証への考察—キャリア教育に関連する学生意識アンケートから—. *電気通信大学紀要*, 36(1), 1-8.
- 9) 宮本知加子, 小田部貴子, 中野美香 & 阿山光利. (2013). 「キャリア形成」の講義概要と実践報告. *福岡工業大学 FD Annual Report*, 3, 53-60.
- 10) 小田部貴子, 宮本知加子, 中野美香 & 阿山光利. (2013). 就業力育成科目「キャリア形成」の授業実践による「4つの力」の変化. *福岡工業大学 FD Annual Report*, 3, 61-68.
- 11) 文部科学省. (2018). 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申), 文部科学省中央教育審議会, 平成30年(2018年)11月26日.

- https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf (2024年5月8日閲覧).
- 12) ビル・バーネット, デイヴ・エヴァンス. (2019). *スタンフォード式人生デザイン講座*. 早川書房.
 - 13) 栗原武志. (2021). 科目間連携における課題と展望に関する一考察: 身体表現活動分野における授業実践を保育実践力につなげる試み. *熊本学園大学論集 総合科学*, 27(1), 23-39.
 - 14) 中野美香. (2023). *FIT キャリア・デザイン BOOK 2023*, 学術図書出版.

謝辞

本研究の実施にあたり, 担当教員の諸先生をはじめ学内の関連部署の事務職員の方々, ならびにクラスサポーター (CS) に謝意を表します。